

アカデミックライティングにおける 「分かりにくさ」の要因は何か？

—— 意見文の分析を通じた一考察 ——

長谷川 哲 子*
堤 良 一**

What Factors Contribute to Difficulty in Understanding Students' Academic Writing?

— An Observation through the Analysis of Opinion Pieces —

HASEGAWA Noriko
TSUTSUMI Ryoichi

要旨

学部レベルの留学生に必要なアカデミックジャパニーズに関して、ライティング能力の評価や測定に関する研究は、喫緊の課題である。本稿では、日本語非母語話者の作文をめぐって、大学教員を対象として行った評価調査の概要を報告する。また、その調査結果に基づき、日本語非母語話者である留学生によって執筆された意見文の分かりにくさの要因についての考察を行う。その結果として、「分かりにくさ」の一端を具体的に明らかにする。最後に、結論として、意見文においては、主張文とその根拠となる事実文の適切な構成がなされているか否かが、意見文全体への評価を決定付けていることを主張する。

Abstract

Research into the evaluation and measurement of writing ability in academic Japanese as required of international students at the bachelor's level is a pressing issue.

平成22年10月28日 原稿受理

* 大阪産業大学 教養部 准教授

** 岡山大学 社会文化科学研究科 准教授

This report outlines evaluations conducted by university instructors on the written works of nonnative speakers of Japanese. In addition, based on the results of these evaluations, observations are presented concerning the factors that affect the difficulty of understanding opinion pieces written by foreign students whose mother tongue is not Japanese. As a result, one aspect of this difficulty will be clarified in detail. It is concluded that the overall evaluations of opinion pieces are determined by whether or not the thesis statement and its supporting evidence are structured properly or not.

和文キーワード

留学生, アカデミックジャパニーズ, 評価, 分かりにくさ

英文キーワード

international students, academic Japanese, evaluation, unreadability

1. はじめに

大学などの高等教育機関に留学する学習者は、レポート、作文、授業のコメントや感想など、様々な場面で書く能力を評価される。こうした非母語話者の作文に対して、評価者である大学教員はどのような評価を行っているのかという点について、長谷川・堤(2007a,b)では、作文の文法面よりも構成面を重視して評価する傾向にあることを調査によって明らかにした。

このことから、文章の構成がよければ「分かりやすい」、構成が悪ければ「分かりにくい」と判断されることになるが、「構成がよい／悪い」とは具体的にどのような内実を伴うものであろうか。

この点について、本稿では、日本語非母語話者が書いた意見文を考察対象とし、評価者の観点から見た構成のよしあしについて、具体的なデータを示しながら分析することとする。意見文を考察の対象とするのは、論拠を述べながら自分の意見を主張するという意見文の体裁が、大学で求められるアカデミックライティング能力の入り口として位置づけられると考えられるからである。

本稿では、以下の主張を行う。

まず、評価者・読者（以下、単に評価者）は、評価する作文（の内容や構成）に対して何らかの「ひな形」を持っていると考え、評価者は、評価対象の作文と自らの持つ「ひな

アカデミックライティングにおける「分かりにくさ」の要因は何か？（長谷川哲子、堤 良一）

形」との整合性をチェックしながら読み進めているものと想定する。意見文であれば、文章のうちに、執筆者の意見を述べる部分としての主張文と、その論拠を述べる部分としての事実文という関係性が存在する。これに対して、評価者のひな形の中には、事実文と主張文の両者が、互いに意見とその論拠という関係性を持っていること、またその両者が対応しているかどうかという項目がある。その上で、これらの項目から逸脱することにより、文章を読み進める上での評価者の負担が生じ、この負担が大きければ大きいほど、より分かりにくいと評価されることになる。

2. 先行研究

非母語話者の作文に対する日本人の評価を調査した先行研究には、次のようなものがある。

田代（1995,1999,2004）は、学習者の作文では、て形接続、視点表現、接続、語彙などの文法や表現の面が読み手の理解を妨げる要因になることを指摘している。

また、田中他（1998a,b）は、日本人による作文評価基準では内容や構成が重要視されると述べており、佐々木（2004）も、旅行アドバイスの文章に対する日本人読者の評価を分析した結果、正確さよりも内容が評価の如何に関わるとしている。

これらの研究のほかに、非母語話者の作文に対して、大学教員の視点を取り入れた研究として、深澤（1994）が見られる。この研究は、工学部大学院生の作文に対して日本語教員と専門の教員が行う添削について、その着目点の異なりを扱ったものである。

また、深尾（2002）は、工学部の専門教官による学習者の解答文への評価を通じて、高い評価を得るのはどのような解答文かについて具体的な分析を行っている。

最後に、長谷川・堤（2007a,b）では、学習者の意見文を大学教員に評価してもらった結果、文章の構成の良し悪しが、意見文評価の高低を決定づけることを指摘した。

3. 分かりにくさの分析

以下では、意見文における「分かりにくさ」の要因を具体的に探ることを目的として、まず、上に述べた「ひな形」と「分かりにくさ」と作文の評価との関連について述べる。

次に、日本語非母語話者の作文例を対象とした評価についての分析例を挙げ、それらに基づいて、意見文における「分かりにくさ」がどのような項目に起因するのか、言い換えれば、どのような項目に当てはまると「分かりにくい」と評価されるのか、について具体

的に明らかにする。

3.1 分析の方法

今回の意見文分析においては、長谷川・堤(2007a,b)と同様に、国立国語研究所作成の「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」を評価対象として利用した。このコーパスから、公共の場を全て禁煙にする規則の制定の是非について述べた作文20篇を任意に抽出し、大学教員16名の評価を得た。なお、これらの教員の専門分野は、人文科学、自然科学、社会科学の各分野にまたがっている。評価は1～4（評価尺度は「1非常にわかりにくい、2わかりにくい、3わかりやすい、4非常にわかりやすい」）であり、評価の判断理由に関するコメント欄を設けた。この作文の中から、比較的評価の低かった作文（評価1, 2）をとりあげ、構成の面から分かりにくさの要因について分析した。

3.2 「分かりやすさ」「分かりにくさ」とは

意見文とは、ある特定のテーマをめぐって筆者の主張が述べられている文である。そして、その主張には、それを主張たらしめる論拠が対応している。このように、意見文では、主張とその論拠を備えたものというパターンがある。このような類の文章に対しては、読む側、つまり評価者の側にある、定型化したパターンにのっとって、評価対象の文章が備えるべき「ひな形」が評価基準の大綱として設定できると考えられる。この「ひな形」は、日本語母語話者が、文章を作成する際のみならず、文章を理解したり、評価したりする際にも適用される典型的なパターンであると想定され、文章を読み進める際にはこれと評価対象の文章とを相互に参照しあう作業が行われると考えられる。そして、その「ひな形」との照合結果が、評価者の評価となるのではないだろうか。その結果として、この「ひな形」から逸脱した作文は高い評価を得られないことになると言える。

長谷川、堤(2007a,b)では、評価の高い、分かりやすい意見文とは、よい構成を備えたものであることを実証的に示した。この点を上記の点と考え合わせると、構成が悪い作文とは「ひな形」から逸脱したものであると言えることができる。

では、なぜ「ひな形」から逸脱していれば構成が悪いと評価されるのだろうか。

「ひな形」から逸脱している作文を読み進める際には、評価者は自らのひな形とのマッチングを進めるために、評価者の側において内容を再構築する必要に迫られる。そして、これは執筆者によって文章化されていない内容を想像し、また補いながらの作業となることから、評価者に対して読解上の負担を強いることになる。このように考えると、文章の分かりにくさとは、読み手側の再構築に際する負担の大きさに起因するものではないだろ

アカデミックライティングにおける「分かりにくさ」の要因は何か？（長谷川哲子、堤 良一）

うか。そして、これが、その文章の評価という場面においては、低い評価へとつながっていると考えられる。

ここでいう「ひな形」の全容の具体的な解明、あるいはそれが日本語以外の言語にも普遍的なものかどうかについては、調査研究の余地がまだ残る。しかし、評価者の評価基準から逸脱したものが高い評価を受けないという点から考えれば、ひな形に沿わない文章が低く評価されたり、分かりにくいと評されること自体は支持されるであろう。

以下では、評価者のコメントを取り上げながら考察を進めるが、その際には、文章の構成に着目する。ここでいう構成については、段落内の構成と、段落間の構成とに分けて考える必要がある。段落間の構成については、いわゆる、頭括型、尾括型、双括型などの段落配列の類型がよく知られている。一方、段落内の構成は段落の中での文の配列や展開であるとすれば、意見文において、“よい”構成を持つ段落とは、事実文と主張文によって構成されているものと考えられる。主張文において、筆者の主張が述べられ、事実文は主張の論拠として主張文を内容的にサポートするものである。両者の関係は、事実文は、主張文に対して背景化された論拠となり、それによって前景化された主張が主張文において述べられる、という相対的なものである。さらに、この両者が互いに主張とその論拠として関連があると評価者に認知される内容を備えている必要がある。

3.3 作文例の分析結果

ここでは、評価者が評価対象の作文に対して付したコメントに基づく考察を通じて、作文例の分かりにくさを分析する。評価の低かった作文のうち、構成面に対してマイナスのコメントが与えられたものを中心的にとりあげ、段落内の事実文と主張文に着目しながら、分かりにくいと判断された要因を探っていく。

例①

たばこの問題は日本だけではない。世界の各国ではたばこのことが問題にもなっている。各国にはたばこのことに対して、規則を作った。とくに5月31日は「世界の禁煙日」になっている。しかし、人達はやはりたばこを吸っている。なぜだろうか？たばこの歴史は何百年があった。たばこが発見されてから、ずっと人の生活と分けられない。たばこの作用はたくさんある。例えば、人が疲れたときは、たばこを吸ったら、すぐ元気をかける。だから、たばこの吸う人がたくさんいる。しかし、たばこの弊害はよいところより多い。たばこの中にはニコチンがある。すこしの

ニコチンは動物に死なれてしまった。そして、たばこの吸う人は吸まない人より、肝臓がかけやすい。死亡率も高い。世界で毎年たばこを吸ったら死んだ人が何百万人ぐらいいる。ですから、現在、各国ではたばこが禁止する規則を作った。

一方、一部の人々はたばこがすきですから、たばこの販売店がたくさんある。たばこを吸う権利はだれにもあつて、公共場所でたばこを吸ったら、臭いにおいがある、人達の気持ちは悪くなった。

だから、たばこを吸う人達はできるだけ公共場所で吸わない。例えば、電車、バス、会社などだ。みんないっしょに美しい環境を守ってください。

この作文例に対しては、「論の展開が直線的でない」(評価者H)、「話題がバラバラ」(評価者G)、「主張とそれに対する説明の対応がとりにくい」(評価者C)のように、述べられている内容が散漫であることを指摘するコメントが目立つ。この作文では、第一段落でたばこの功罪が同時に並列的に述べられており、このことが「論の展開が直線的でない」「話題がバラバラ」であるとの印象を与える。さらに、第一段落、第二段落には、ともに主張文がなく、これらの事実文が何を主張するために書かれたのかが明らかでない。最後の段落として、結論を導く接続詞「だから」によって第三段落が導入されるが、この主張文は、どの事実文を受けて書かれたものが定かではなく、その内容は、先行する第一段落、および第二段落による帰結としての結論とはとらえがたい。また、各段落が背景化された文ばかりで構成されているため、内容が羅列されているだけと認識され、何が重要なかが明示的でない。そのために、全体として論が破綻しているような印象につながったと考えられる。

例②

縛られる人間

「たばこを吸うのは健康を損じる」これは子供さえわかることだ。しかし、全世界の喫煙ファンは相変わらず吸いつづきました。どうしてでしょうか？社会人として、色々な圧力を受け取りさせられますが人によってまぎらす方法は違います。ある人は喫煙を選ばれて、すぐ爽やかになりました。

人間の権利として、たばこを禁止することがおかしい、合理ではないのですが、「別の人と関係がない」言方がありますし、実は別の人と関係が本当に全然ありませんか？

人間は地球環境で生活しています。煙は空気中に広がられて有害物も散在してきました身にまわる人だけではなく生きているものに影響も有ります。

だから、基本的な権利をもらった同時に「別の人々の健康のため」という義務はあるべきだ。

もっと多くの自由がほしいなら、自分を縛らなければなりません。これはゲームの規則だと思います。

「あなたはタバコが好きだ、私はタバコがいやだ」誰でもこうようふうな権利があります。そして、公共の場所でたばこを吸えないよう適当だと思います。

人間は本の自由がぜんぜんありませんとは義務を果たさず権利のみにもらいたい自由がないということです。「自由」と言うとロマンディチェックな感じがうみ生れやすく、人生の一つの大きな目標になっていますが、たばこのけむりのように一時のまぼろしだけで、事物の本来の正体が隠されてしまいました。健康を代価にしないとたばこの楽しさが感じられないと同じく、義務を果たさなければ、権利も取れません。

この作文を一読した場合、評価者は筆者の主張がどこに表れているのかが把握しにくいという印象を抱くようである。それは、「主張のkeyになると思われる文の表現が日本語として適切とは言えないため、意味（筆者の含意）がわかりにくい」（評価者H）というコメントに現れている。仮に、「もっと多くの自由がほしいなら～」「あなたはタバコが好きだ～」の文を主張文とみなせば、それ以下がその主張をサポートする事実文というひな形を読み手は想定して読み進めることになる。そのような想定に反して、後続部分においてはサポートとなる事実文の内容がとらえられない。これは、「ゲームの規則」「ロマンディチェックな感じ」のように、読み手に理解されない表現が使用されているためであろう。他にも、「権利・義務・自由という抽象的概念が喫煙という具体的なトピックにおいて効果的に使われていない」（評価者K）とのコメントにもあるように、文章全体に関わって、使用する語彙や表現の正確さや適切さに問題がある。そのために、最後の段落でも、権利、義務、自由、という抽象語彙が効果的に使用できておらず、結果として、文面からは主張とそのサポートという関係が構築できず、評価者にとっては主張が不明であると見なされてしまう。

また、この作文に対しては、「一つ一つの文の文法・表現を訂正し、文同士のつながりを考え、段落どうしの関係を考えていって、全体がつかめるという労力が必要である」（評価者B）とのコメントがあった。このことから、文章を理解する上で、表現の訂正に加え

て文意の推測を要する、という負担感が、当該の文章が分かりにくい、という評価の要因であることがうかがえる。評価の低い作文でも、評価者側でかなりの負担を伴って解釈する再構築作業を行えば、その内容が理解できることになるが、そのような「労力」がかけられなければ理解できないということが、分かりにくさに結びついていると言える。

例③

たばこというのはある物が吸える物です。現在はたばこを吸う人ますます増えました。たばこもかんたんに手を入れます。ねだんもそんなに高くないです。しかし、たばこを吸うのはどうしてですか。

いっばん人はおとなになったしょうちょうとしてたばこを吸います。でも、たばこを吸わなければ大人にならなでしょうか。こんな考え方はある上手な人としてはいはずです。

ところで、ストレスがたまってきたたばこを吸う人もいますが本当にストレスが解消になるかといと、そんなことはないでしょう。本当にばかばかしいだろう。たばこを吸うのはどんなかんじになるか。たとえば、一つのじっけんをしました。前にとこか一つの高校生をあつめて、アンケートをおねがいします。どうしてたばこを吸いますか。このあとのへんじはいろいろなへんじがかえてもらいます。「私はさびしい時吸います。お金があります。しつれんしました。眠くてたまらない」という学生のへんじを言ってもらいます。おおぜいの人にはわるいけんこうにわかっています。たばこを吸ってくまいました。

けれどもいい点があります。もし少ない数で吸ったらくすりになれます。でも私にとってもちろんたばこはわるいことです。

この文章全体を見渡すと、最後までテーマに即した主張が明示されず、事実文の羅列に終始していることがわかる。そのため、事実文をいくら重ねて記しても、「高校生のアンケートについての議論が筆者の主張の論拠となっているが、説明が十分といえない」(評価者H)というような、不足感を伴った印象を与えてしまう。また、最後の段落で「けれども」と逆接続が展開されたまま、文章が終了しているため、読み手が全体を統合的に理解するのは困難であると考えられる。その結果、「基本的に、何が言いたいのか、結論は何なのか、理解できない。文法や表現の問題だけでなく内容、特に論理の展開が読めない」(評価者N)、「主張点がはっきりしない」(評価者A)とのコメントにあるように、結論が何であるのか、読み手に理解されない。このような主張文に関わる問題点に加えて、事実文相当の部分も、

文法面での誤用により、内容が理解されにくくなっていると見られる。

例④

たばこ…

どこでも問題になっている。たばこをすっている人々色々種類である。第一はなやんでいる時安心するためにすっている。第二は金持ちの人々の要用になっている。第三は興味を持って一度をすって好になったなどたくさん人のげいんがある。法律ではたばこをすうことをなんと書いているかもしれないけれども私にとってはたばこをコマーシャルすることはだめだと思う。そうするとなん度も新聞にコマーシャルをしていたことを見ていた。人々はたばこは健康に悪いと知っていたけれども吸う人々がどんどん増えている。まだたばこの悪い影響でたくさんの恐ろしい病気が増えている。例えば肺炎、一番悩まされていたのはストレットチルデンもたばこをするひること。そして女の人はやせるためにたばこを吸うのはばかだと思う。ここで私はたばこの悪いことを述べている。たばこのよい影響を知らないからだ。

まだたばこの生産はその国の一つの生産と、輸出となっている国もある 悪い影響が多いけれどもたばこの種類が増えている。まだたばこをすっている人は環境をよごれている。吸って終わったらそのところにすてる。それを塵箱に入れたらいい。たばこをすって仕事をおくれることもある。それからたばこの悪いことを覚えて、吸うことしないようになった人もある。その人々一つの話では「私はたばこを買った金を集めたら、今、二階の建物、車を買うことができますね」と言っている。たばこは色々なことにえいきょうしているのを見られている。生活、仕事、体などで。私の聞いたことでたばこのきょうそうもあるそう。例えば「だれがたばこを速やく吸うか、「だれが一度どれぐらいたばこを吸うか」などたばこのレコードが「世界のめずらしいの本」に書いている。

みなさんすいえいすることをきんして 安心にくらしたい。

この作文に対しても、上の例③と同様に、テーマに即した明解な主張文が見あたらず、たばこに関する事実文を書き連ねている文章であるとのコメントが目立った。「たばこは良くないという意見を持っているのはわかるが、たばこについて知っていることをいろいろ書いてみただけの文章だと思う」（評価者M）、「反対理由を思いつくままに書いているので、つながりが分かりにくい」（評価者B）のように、たばこに対して否定的意見を持っていること自体は評価者には理解されている。つまり、主張そのものが分かりにくいので

はないのである。それにもかかわらず、文章全体としては、分かりにくい、として低い評価を受けることになったのはなぜだろうか。それは、事実文の内容を収束させるような結論が明示的に記されなかったためではないか。「様々な知識の寄せ集めで論理の展開がない。従って伝えたいことが何で、それを言う為に何を書いているのか理解できない」（評価者N）とのコメントが示すように、主張がなく、事実だけが提示されているため、意見文としての評価は自ずから低くなってしまったものと考えられる。

例⑤

まずお金がかかります。それから、健康 なのです。現在、世界に何万人がたばこで死にます。妊娠者がたばこを吸うと子供に悪い影響を与えます。あの子は肺炎になるかもしれません。また、頭もおかしくなるんでしょう。今日、たばこのコマシャルは拡大されてたばこを吸う人数が増えるとともにたばこで死んだ人数も増えます。子供はよく真似るものですからテレビで放送しない方がいいと思います。公共の場所では禁止した方がいいです。原因はたばこを吸わない人はたばこを吸う半分のたばこを吸い込みます。そのけむりはとても毒なのです。母はわかいからたばこを吸って来ます。結果は毎日ずっとせきをします。医者もしかたがないのです。

たばこを吸うのはほんとうみんなの権利です。けれどもほかの人の健康ですから吸わないでください。規則を作って禁止するのはおかしいと思いません。しかし、大切なのはひとびとの意識なのです。

みなさんに「わたしは立派な人だ」白分は見せようにたばこを吸う女の人はますます増え来ます。今日本ではたばこが問題になっています。現在世界じゅうでたばこを吸わない運動してきます。

この例では、まず、書き出しが唐突であるという印象を受ける。この唐突さは、読み手の備えている意見文のひな形からの逸脱に基づくものではないだろうか。「冒頭の書き出しからは、何について書かれる文章かわからない」（評価者J）とのコメントにあるように、意見文の書き出しを読めば、それが何についての意見を述べているものかが分かるはずだという想定が読み手にあると考えられるからである。読み手にとっては、何について述べているか分からないままに読み進めていくうち、最後の段落にたどりつく。最後の段落が結論のように読めるが、テーマに即した意見を述べていないため、さらなるひな形からの逸脱として、評価が低くなる。このことは、「結論部のまとまりが悪い」（評価者N）、「意見を求められている文章の最後に「～ています。」と客観的事実を述べられると、それ

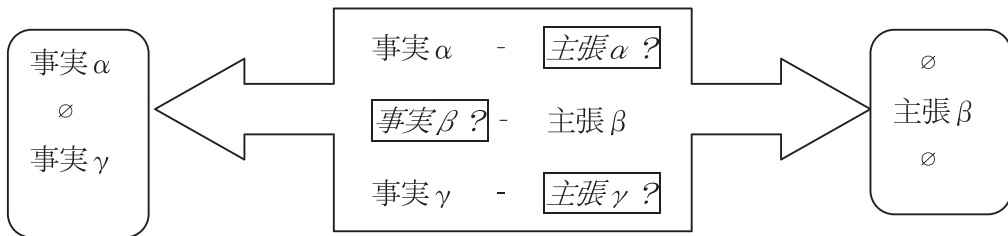
アカデミックライティングにおける「分かりにくさ」の要因は何か？（長谷川哲子、堤 良一）

までの文章で言わんとすることも、どう理解したら良いのかわからなくなる」（評価者F）というコメントからもうかがえる。全体から見ると、第2段落がテーマに対する主張文だと思われるが、そのサポートとみなせる事実文の部分が見あたらず、主張文と事実文の対応が構築できていない。

3.4 「分かりにくさ」の要因

以上では、分かりにくいと評価された作文例について、意見文のひな形、および、主張文と事実文の対応という観点から、分かりにくさの要因を考察した。

意見文では、事実文と主張文の適切な組み合わせが必要とされる。下図にその対応を模式的に示す。

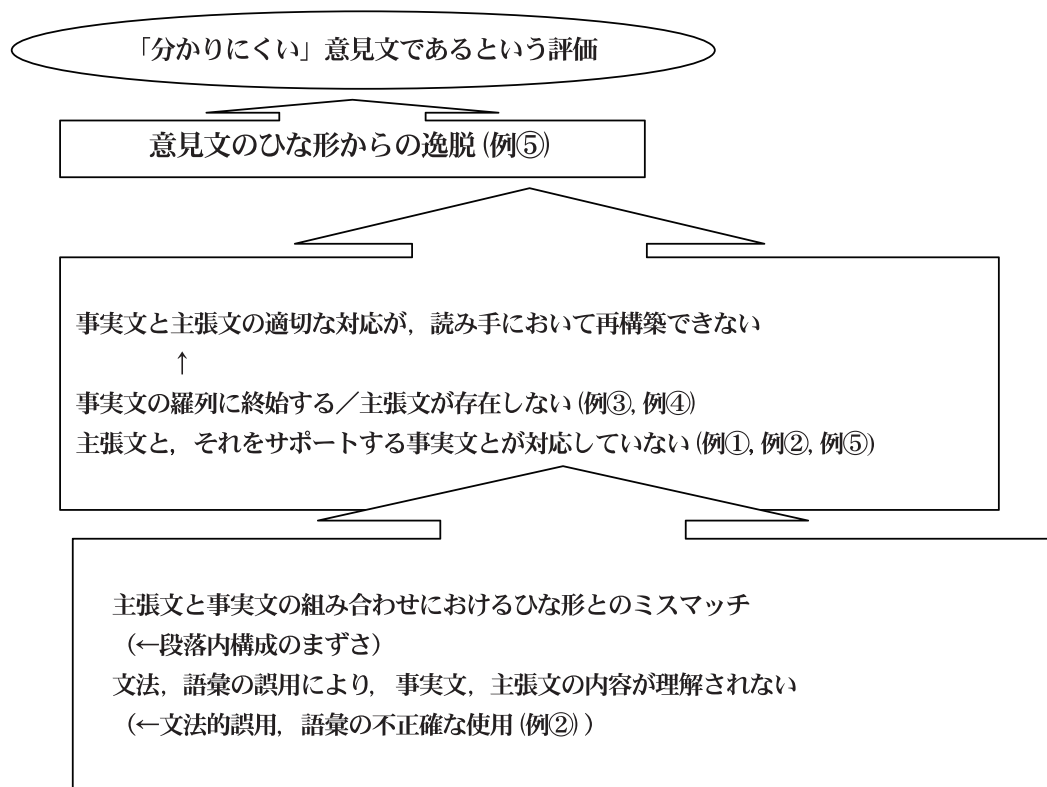


たとえば、「[事実]→[主張]→[事実]」という文章展開を持った作文を読み進める際、まず、読み手は、冒頭の「事実文」を目にする。これを「事実 a 」とする。そして、それに後続する部分に「主張文」があったとする。この場合、事実と主張の連続を、意見とそのサポートという意見文のひな形に沿って、読み手は先行する「事実 a 」との対応を結びようとする。つまり、後続する「主張文」を「主張 a 」とみなそうとする。しかし、そこに内容的な対応や関連が設定できない場合、それを「主張 a 」と認識することは難しい。このような場合、「事実 a 」に後続する主張文は、もはや a とは別の内容を持つ「主張 β 」であると解釈して読み進めていくのではないだろうか。この時点で、事実と主張の対応に齟齬が生じている。つまり、事実 a に対応すべき主張 a がなく、同じく、主張 β に対応すべき事実 a が欠けているのである。こうした文章展開へまた重ねて、新たな「事実」が記されている場合、これを「事実 γ 」とみなすことになる。その事実 γ に対して、主張 γ が対応しないまま文章が終結すれば、読み手は、結論が不明であると認識する。結果として、実際に作成された文章では、 a 、 β 、 γ と三つの内容を扱っていても、事実と主張の対応から見れば「[事実 a]→[主張 β]→[事実 γ]」という、不均衡な対応ができあがり、その文章に対しては、分かりにくい、という評価が与えられるのではないだろうか。

このような事実文と主張文のミスマッチは「論点が散漫」、「事実の羅列にすぎない」、

ひいては「論理的でない」などの評価を招き、最終的に、意見文全体に対する評価を低くするものと考えられるのである。

以上の内容をふまえ、先に挙げたコメント内容を下図にまとめる。



4. まとめ

以上、日本語学習者の意見文に関して、母語話者によって分かりにくいと評価される意見文について考察してきた。ここまでの分析により、意見文の構成、特に主張文と事実文の組み合わせの観点から、分かりにくいと評価される要因を以下の二つに分けることができる。

- a. 主張文のサポートとなる事実文がない、もしくは不足している
- b. 主張文そのものがない、もしくは不足している

まず、a.のような事実文の不足は、意見文においては主張に対する論拠の不足として主張の内容への理解を低める。その一方、b.のような主張文の不足は、主張が読み手に示さ

アカデミックライティングにおける「分かりにくさ」の要因は何か？（長谷川哲子、堤 良一）

れないことで読み手の理解を妨げる。つまり、事実文と主張文のいずれが不足しても、「主張が分からない」と判断され、それが文章全体への評価に影響し、意見文として「分かりにくい」という評価を受けると推測される。

また、b.のように主張文そのものが欠落している場合、意見文というジャンルが自明的に要求するものが提示されないことになり、評価を決定的に下げることは否めない。さらに、主張文において、文法のミスが多く、文そのものが理解されない場合には、その文が主張に該当すると理解されず、結果として、主張文がないとみなされる可能性もある。

5. 今後の課題

上記のa.とb.を比較すると、b.のようなタイプの作文に対する指導において、学習者にはより高いプロフィシエンシーが要求されるのではないだろうか。事実文が論拠としての具体的事項の記述であるとするれば、主張文は、論拠の内容をまとめあげるものとして、往々にして事実文より抽象的な内容になるため、これまでのプロフィシエンシー研究に鑑みれば、より高いプロフィシエンシーが要求されると推察される。

今後は、アカデミックライティングに要求されるプロフィシエンシーの内実をより具体的に探るために、様々なジャンルの文章に関して、評価者が想定している文章の「ひな形」の全容を解明する必要がある。

参考文献

- 佐々木瑞貴（2004）「一般日本人は何に注目して学習者の文章を読むのか—旅行のアドバイスの場合—」『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか—平成12～15年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書（課題番号12480058）』pp.197-214
- 田代ひとみ（1995）「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」『日本語教育』85号、日本語教育学会、pp.25-37
- 田代ひとみ（1999）「読み手から見た説明文の分かりやすさの分析—日本語学習者の文章を中心に—」『東京大学留学生センター紀要』第9号、pp.55-73
- 田代ひとみ（2004）「日本語学習者の意見文における読み手の理解を妨げる問題点」『明海日本語』第9号、pp.21-39
- 田中真理・坪根由香里・初鹿野阿れ（1998a）「第二言語としての日本語における作文評価基準—日本語教師と一般日本人の比較—」『日本語教育』96号、日本語教育学会、pp.1-12

- 田中真理・初鹿野阿れ・坪根由香里（1998b）「第二言語としての日本語における作文評価—「いい」作文の決定要因—」『日本語教育』99号，日本語教育学会，pp.60-71
- 長谷川哲子・堤良一（2007a）「「分かりやすさ」を決める要因は何か？—どのような文章が分かりやすいと評価されるか—」『2006年度日本語教育学会第10回研究集会：関西地区 予稿集』pp.65-68
- 長谷川哲子・堤良一（2007b）「大学教員による非母語話者作文への評価について」『第9回専門日本語教育学会研究討論会 発表要旨集』pp.18-19
- 深尾百合子（2002）「科学技術作文教材の開発およびモデル解答作成のための解答文分析—工学部専門教官による解答文の評価を通して—」『多摩留学生センター教育研究論集』第3号，pp.33-41
- 深澤のぞみ（1994）「科学技術論文作成を目指した作文指導—専門教員と日本語教師の視点の違いを中心に—」『日本語教育』84号，日本語教育学会，pp.27-39

付記：本研究は科学研究費補助金（課題番号18520415, 21520554）の助成を受けたものである。